味の「素」

私は来る日も来る日も食物を調理している。然し、その出来ばえはいつも同じ様には行かない。同じ量を、同じ方法によつて、同じ場所で調理していても、その味は同じでない。

甘いときも、からい時も、苦くなる時も、全く香りのないものになる時も、澄んで居る時も、濁つている時もある。そして外観は変りなく同じ様でも、その味はいつもちがう。その上に出来上つたものに対して美しく愛着を覚えるときも、また、醜く倦怠の情がこみあげて来てなさけない時もある。

これは私には大きな謎である、と同時に不可抗力的なものでもある。私はこの素が何であり、又何処にあるかを知り度いのである。不思議にもこの謎は私自身の内にある要素が材料に作用している、即ち人間にあると云うことを確かに認めるのである。この味を左右するダイナモは人間個なるものの奥深く潜在しているものであると云えよう。

私はこの味のダイナモを究明したい。然し、この探求は私には余りに大き過ぎる。その探求の苦しみ、その喜びをわかち合う伴侶が欲しい。伴侶は自分の体験、又は先哲の遺産であるかも知れない。

先哲、先輩から伝授された知識、ふとした機会から湧いた思いつき。それ等の総体が現在の「私」である。私は無限に拡まつている宇宙の有機体、そして一刻も停止することなく正確に運行する宇宙の原理、そのダイナミックな巨大な力を思う時余りに微々たる私にみじめさを感ずるのである。（塩野）